第八回 インド人口統計資料の活用

西川由比子

開発途上地域における貧困と開発問題に興味を持った頃、「人口急増と成長に関する低水準均衡の罠」―経済成長の成果が人口増加によって相殺され、一人当たりの所得が低水準に抑えられてしまう状態―への着目がインド人口問題への関心を深めることになった。この貧困と人口急増の悪循環をいかに解消するかがインドにおける積年の政策課題であり、開発途上国のなかでもいち早く人口増加抑制政策が導入された。政策導入から半世紀を経て、人口転換の進行にともなう人口構造の変化により新局面が展開されている。国内には依然として様々な格差を抱えてはいるものの、貧困の悪循環を引き起こす要因であった人口は、豊富な労働力と消費市場として注目されてきている。

インドの統計データは実に多い。インド統計書とくに人口センサスを網羅的に見たのは、当時統計部研究員であった早瀬保子さんからアルバイトを依頼されたことによる。年齢別人口表のデータベース作成ということで、州および直轄地区ごとに刊行されている人口センサスから年齢別人口構成表を探し出し、コピーする作業であった。まだアジア経済研究所が市ヶ谷にあった頃のことで、六階にある統計資料室と一階統計資料室（倉庫？）から年齢別人口表を探し出してはコピーするという繰り返しであった。人口センサスは調査項目ごとに掲載されている。年齢別人口表はGeneral Populationではなくなく Social and Cultural Tablesに収録されている。年齢別人口については教育水準、就業等カテゴリー別にも作表されているが、これらの表に示された年齢区分はカテゴリーごとに微妙に異なっている。センサス刊行物には落丁も多く、あまり質の良くないざら紙に印刷された数字は時として消えていた。この場合は合計値から再計算し、補完することも教えて戴いた。また、利用頻度があまり多くないセンサス刊行物には袋とじのままのページもあり、これを切り開くときは「初めて」の感じにちょっとわくわくしたのを覚えている。この経験によりインドセンサスにある統計表をおおまかに把握できたことは、その後の研究に役立っている。

インドの人口データは静態統計としてはイギリス植民地下にあった一八七二年以降実施されてきた人口センサスと、住民登録、標本登録制度（SRS：Sample Registration System）および各種の標本調査により提供される動態統計がある。人口動態は届け出統計からまとめられるが、住民登録は申告率が低く、統計的信頼性に欠けており、これを補うために標本調査が実施されている。人口動態を含む社会・経済状況に関する調査である全国標本調査（NSS：National Sample Survey）が開始されたのは一九四九年である。NSSによる人口関連調査の開始は一九五一年であるが、調査の実施日が不定期であり、統計利用上に問題を残していた。これを補完するため一九六四年からSRSが実施され、現在も主要な人口動態統計となっている。死亡統計に関しては標本調査ならびに保健局による刊行物がある。一九五二年から実施されている家族計画プログラムも統計資料源であり、家族計画受容者に関連するデータおよび出生関連統計は家族計画年次報告書に所収されている。また、USAIDの支援を受け開発途上地域で行われている出生力、家族計画および保健に関する調査である「人口保健調査」（DHS：Demographic Health Survey）が一九九二年以降、三回実施されており、これらを利用した研究成果も多々公表されている。

以上のようにインドにおける人口関連統計は実に多く存在しており、刊行された統計から連続性と整合性を見出しながら分析するには、これらのコレクションが網羅されている必要がある。アジア経済研究所の図書館ではこれらの統計書が開架式で閲覧できる。近年のデータに関してはセンサス、SRSおよびDHSはインターネットを通して入手可能であるが、時系列、州あるいは県別データとなると統計書で確認しながらの作業となる。ほぼ調査項目を決めて図書館を利用するが、片道二時間を超える道のりなので必要な統計資料を検索し、コピー箇所を決め、スタッフコピーをお願いし、郵送して戴く場合が多い。時間を節約する意味でもスタッフの方たちの手を煩わせてしまっているが、いつも丁寧な対応をして戴き感謝しております。統計書以外では新着SDIサービスが役立っている。地域・分野等を登録するとマッチングする新着資料情報がメールで送られてくる。自分自身の目が届く範囲は限定的なので、新しい研究動向を知る上でも大切な情報源となっている。必要な文献に関しては図書館相互サービスにより文献複写が可能である。

（にしかわ　ゆいこ／城西大学経済学部教授）